

# 古代東北と、世界の六大文明

阿子島 香

## [読む館長講座⑧]

東北歴史博物館館長講座概要

2023年1月7日

「東北グローバル考古学 part2—原始・古代のロマンと科学—」⑧

### はじめに

今年度の館長講座は、世界の考古学から人類史のテーマを取り上げて、宮城県や東北地方の遺跡について、比較文化的に考察しました。当館長の独自の視点を含めて、探ってきました。第8回は最終回で、前回のテーマ（「首長」から「王」へと至る道）に続いて、国家の形成と古代文明について考えてみます。東北地方の古代史（4世紀～11世紀）を、世界史の脈絡で捉えてみるという大きな課題への、一つの手掛かりになればと思います。今回の副題は「文化進化論と『拡大文明』」としました。

### 東北の古代と世界史

日本列島の中での東北古代には、特有の意義があります。3世紀半ばから後半に、前方後円墳の造営が畿内で始まり、やがて東北に波及して以降、東北南部、中部、北部のそれぞれの地域で、古墳文化の多様な受容がありました。その後の律令国家の北辺をめぐる歴史的な状況にあっても、地域的な多様性が目立っています。国家の側では「蝦夷」との関係が重要な時代ですが、私たち東北人にとっては、北からの視点で考えていくことが欠かせません。その後「38年戦争」が終わって後も、「北の文化・社会」は健在で、厳しい争乱の11世紀を経て、平泉の文化が開花します。

「38年戦争」とは、774年（宝亀5年）桃生城への「海道（蝦夷）」の攻撃から、811年（弘仁2年）の文室綿麻呂による征夷終結宣言までの間を指し、学会でも広く受け入れられている考え方です。実際にはそれ以前にも、抗争はあり、それ以後にも戦闘はありましたが、律令国家と蝦夷側との戦乱のピークをよく表現する言葉と思います。

また「古代」とはいつまでを指すかについても、東北では平泉政権の成立の前夜までという考え方が強いようです。全国的には、社会経済史を重視する立場で、中世は院政期に始まるという学説が通説になりました。また鎌倉幕府の成立も、館長の世代はイイクニ1192年と習いましたが、近年は1985年とされます。ここで深入りは避けませんが、歴史における時代区分、区切りの基準は、どの時代を取り上げても、難しい問題に触れることになりま

す。考古学上の旧石器、縄文、弥生、古墳の各時代についても、諸説があります。(例えば、藤尾慎一郎 2021 参照)。

### 古代文明の「中心？」と「周辺？」

このように、ごく概括的に見た流れを、それでは東アジアの中で、より広くは「古代文明の展開」という観点で、あらためて考察してみようというのが、今回のテーマです。私は「古代文明の中心と周辺地域」という人類史上の大きな問題につながるのが、東北の古代史であると考えてきました。日本史においては、ともすれば「倭」「律令国家」の側からの視点で、東北が語られることが多いようです。古墳はどこまで到達したか、北限はどう動いたか、どれだけ文化内容が「中心」に近いか、律令的行政は、いついつにはどこまで到達したか、などです。

世界各地の古代文明の、研究の歴史を見ても、類似するような研究傾向がありました。けれども文明発祥の土地および周辺に波及していくプロセスと、時間が経過していく中で「周辺」と「中核地」とが、大きなシステムとして形成されていく過程について、周辺地域との関係を含めての不可分な一体として、文明を考えなければならないという新しい学説が、いっそう重要になってきているように思われます。

### 「拡大文明のプロセス」概念

私はプロセス考古学的な、そのような観点を重視して、「拡大文明のプロセス」という概念を提唱したいと考えております。「周辺」といわれる地域の文化的水準を再評価していく「文化相対主義 cultural relativism」(文化人類学の概念)の立場で、中核と周辺がどのようなシステムで「全体的な拡大文明」を構成していたか、追究していく方向です。

古代文明には、その地域が発祥の地であった一次的文明と、周囲に波及していく中で生まれた二次的文明とが区別されます。しかし、二次的文明が劣るという意味ではなく、あくまでも形成のプロセスについての分類といえます。日本の古代国家は、ある意味で典型的な二次的文明ですが、このように捉えることには、日本の文化や国をオトシメル(貶める)のような意味は、全く含まれていません。あくまでも古代文明の形成を、プロセス考古学的に比較文化的視点から考えているものです。(蛇足のような一文ですが、ネット上に流通している言説には、日本を外視点から論評することが、何か別の国々を持ち上げるような視点につながるが如き論調も散見されますので、あえて一文付け加えました)。人類学的「文化相対主義」の立場からは、特定の文化の間での「優劣」を問うことは、厳に戒められることで、方向を問いません。

### 「四大文明」から世界「六大文明」へ

館長の世代は学校で、「四大文明」について教えられました。メソポタミア文明、エジプト文明、黄河文明、インダス文明です。近年は、「四大河文明」として扱われているようで

す。黄河文明は、四川省の三星堆文化のような揚子江流域の文化が明らかになって、それらが長江文明とされたので、合わせて「中国文明」と呼ばれるようになりました。四大河文明は、灌漑農業が文明形成の大きな要因であったという理解は、現在も変わりません。

「日本古代アメリカ学会」などの努力もあって、アメリカ大陸の二つの一次的文明も、人類史上たいへん重要な歴史として、「六大文明」と称するようになってきました。古代メソアメリカ文明と、古代アンデス文明です。前者は、オルメカ文明、テオティワカン（メキシコ）文明、マヤ文明、アズテック（アステカ）文明などを含みます。後者は、シカン文明、ナスカ文明、インカ文明などを含みます。一応、一様に「文明」と記しましたが、「文化」と呼ばれる場合も多いです。今回講座のタイトルは、四大河文明、プラス二つのアメリカ大陸の文明、合わせて「六大文明」という意味です。

### 「文明の遺伝子」という考え方

さて、文化進化のプロセスを考察する上で、文明の展開をどう考えればよいかというのは、複雑で難しい課題です。館長仮説としては、生物の進化プロセスを意識しながら、「文明の遺伝子」になぞらえて考えております。どこの地域の一次的、二次的文明を対象にしても、極めて複雑な、無数の文化要素が、相互に交流しながら、次世代に受け継がれて進化していく状況で、中心地から一方向に広がって周辺地域の水準を上げるというものではありません。

「文明の遺伝子」は、交換され、双方向に絡み合い融合して、新たな文明段階をもたらします。文化人類学において「文化」は後天的な実体であり、キャリアが保持します。人々自身は世代的に連続することが多いため、「人種と民族」はしばしば混同されますが、あくまでも人々が有する文化が、「文明の遺伝子」を構成する実体です。古代文明は発祥の地域から次第に範囲拡大し、多様性を具備するようになり、「**拡大文明圏**」として共通の基盤と多彩な文化要素を有するに至ります。

昔から、「文明論」として、多くの学者たちが、文明の発達を論じてきました。考え方としては、多くの先学とそれほど違ってはいないと思いますが、理論的に整理して考察することも重要と考えます。講座では具体的事例を取り上げて、考えてみました。中華文明の北東（日本）に対し北西（西夏王国）の遺跡です。「**拡大東亜文明**」の一部と言えるでしょう（「拡大東アジア文明」とも言えます）。ヨーロッパの古代は「**扩大大地中海文明**」の一部と言えるでしょう。

漢字を「文明の遺伝子」とした多様な発展と、フェニキア文字から各種アルファベット文字に至った歴史などは、分かりやすい例かもしれませんが、生活技術、土木建築、文物、工人工芸技術、社会制度、行動規範、宗教観念、はじめあらゆる分野での「文明の遺伝子」交換による文明圏の進化が認められます。複雑きわまりない文明の動態を、要素に分解しつつ、相互関連する有機的な全体として捉えていくことはできないでしょうか。

## インダス文明研究の開始

世界の六大古代文明の中から、まずインダス文明を取り上げてみます。四大河文明のうちで、日本では一般に比較的なじみが薄いかもかもしれません。スライドは、当館の昨年**春季特別展「知の大冒険」**(2022.4.23 ~ 6.26)からの例です。東洋文庫に所蔵されている名品から選りすぐった展示で、大変ご好評をいただきました。ご来館いただいた皆さん、ありがとうございました。図録 No.47、『モエンジョ・ダーロとインダス文明』ジョン・マーシャル著、1931年、ロンドン刊です。展示のうち「インド - 人々を魅了し続ける文明 -」の部分でした。1920年代にイギリスの考古学者によって英領インドで発掘調査された遺跡は、北西インド一帯に、都市文明が存在したことを明らかにしました。その記念的な研究書で、写真は「大浴場と周囲の部屋、窓のある壁」です。

インダス文明は、紀元前 2600 年～1900 年頃に、インダス川流域に展開し、モエンジョダロ(死者の丘という地名)やハラッパーの遺跡で有名な、高度な都市文明でした。両遺跡は現在のパキスタン内にあります。整備された道路、下水道、建造物、銅と青銅の高い加工技術を有していました。インダス文明は東西 1500 km、南北 1800 kmに広がって、2600 以上の遺跡が発見され、約 150 遺跡が発掘調査されています。

灌漑農耕を行ない、牧畜はウシ、コブウシ(南アジアに広がっている種)を飼養しました。宗教的にはテラコッタ製女神像による豊穰儀礼や、「火の祭祀」が知られています。レンガを焼成し、製綿を行ないました。紅玉髓のビーズ、分銅などを、古代メソポタミア文化と交易していました。インダス文明が滅亡した原因として、砂漠化、河流の変化、気候変動、アーリア人の侵入など諸説が議論されています。スライドは印章で、ウシの図案があり、「インダス文字」が彫られています。

## 古代マヤ文明と青山教授の研究

古代マヤ文明に関して、日本人考古学者では、茨城大学の青山和夫教授が国際的な研究をリードしています。青山氏は、東北大学出身で、館長の後輩にあたりますが、マヤ文明に取り組む具体的な手段として、石器の使用痕分析法を最大限に活用されてきたことが、特筆されると思います。氏が学生時代、私は助手を務めておりまして、一緒に石器使用痕分析の諸分野の中でも、東北地方弥生時代の石包丁の実験使用痕研究を行なう機会がありました。最近その研究を再評価して、東北大学総合学術博物館の紀要(Bulletin)に、共著で発表しました。

東北の弥生時代には、太平洋側を中心に、数多くの「石包丁」という磨製石器が製作・使用されました。これらは石器名称がもつイメージとは違い、稲の収穫具であり、東アジアに広い分布を持っています。稲穂の直下でイネを収穫する(穂首刈り、穂摘み)方法を、使用痕光沢の強さと分布から、断定することができました(スライド)。(「Verifying the Function of Yayoi "Ishibocho" Tools from Tohoku District」『Bulletin of the Tohoku University Museum』No.12, pp.77-89 (K.Akoshima, K.Aoyama) 2013年)。どなたも東北大学附属図

書館の HP から、総合学術博物館の項目で、無料ダウンロードできますので、どうぞご利用ください。東北地方の祖先たちが、農業を始めた時代のことです。

また 2021 年には、『考古学ジャーナル』誌上で、私が特集「石器使用痕分析の到達点」を組んだ中に、青山氏に「マヤ文明と石器使用痕分析」を寄稿いただきました。長年の友情をうれしく思います。スライドは、マヤ文明の石刃や剥片石器（アグアテカ遺跡出土）、磨製石斧（セイバル遺跡の翡翠製、儀礼用石器の供物セット）の分析の例です。日常生活を支えた道具では、やはり石器が最も重要ですから、いわば「文明の基層」に迫る研究分野といふことができます。巨大神殿や石碑の研究とは、また別の大きな意義がある分野です。

### 謎と神秘ではない石器の都市文明

古代マヤ文明は、しばしば密林の中の「謎の文明」のようにイメージされます。テレビなどでも紹介されることも多いですが、以前からかなり片寄って報道される印象があります。別に「謎と神秘」でもなくて、多くの古代文明同様に、特色ある一つの文明でした。成立して衰亡した歴史は客観的に研究が蓄積されてきました。金属製の利器を使用せず、石器が道具であった点は、特筆されます。また車輪のある車を持たず、運搬用の家畜を有せず、人々が物資や材料を運んでいました。一方では、非常に高度な天体観測を行なって、正確な暦を作っていました。広大な領域国家を構成することはなくて、並び立つ都市国家が、互いに共存、抗争を繰り返していました。

アメリカ考古学会では、マヤ文明の研究は非常に大きな分野として多くの研究者が取り組んでいて、学会の年次大会などでも、例年、分科会が多数あります。前回の講座でもご紹介しましたように（第 7 回館長講座概要「『首長』から『王』へと至る道」参照）、米国考古学は基本的に人類学に属しますので、国内と海外をあまり区別しません。アメリカ考古学会の公式機関誌も、2 種類あって、冊子体では、American Antiquity と Latin American Antiquity のいずれかを購読するようになっていました。

マヤ文明について、青山氏の業績を交えて若干ご紹介します。同氏の石器使用痕の分析は、東北大学石器使用痕研究チーム（第 5 回館長講座概要「石器の使い方を科学する」参照）の方法を、ホンジュラス、グアテマラの石器石材と出土品に見事に適用したことで、国際的な注目を受けました。（青山 2012『マヤ文明－密林に栄えた石器文化』）。その中で、金属顕微鏡を使用する東北大学チームの実験考古学の手法について、この方法は、『伝家の宝刀』だったと、たいへん文学的に表現されています（79 頁）。

青山氏は、青年海外協力隊時代にホンジュラスのラ・エントラダ地域で、実験使用痕分析の基礎的研究を開始しました。その後、同国のコパン遺跡、グアテマラのアグアテカ遺跡やセイバル遺跡の石器に、大規模な適用を行なって、マヤ考古学の石器分析の先端を開かれてきました。黒曜石製やチャート製石器で、世界で最大級のマヤ石器使用痕データベースの研究を継続されています。私は 1980 年頃、東北大学で芹沢先生の下に、まだまだ未開拓であったこの分野を始めた頃の状況を回想しますと、世界の中でこのように、同じ方法で活躍

されている氏の研究に、大きな感慨を覚えるものです。

古代マヤ研究は、神殿やピラミッド都市など、いかにも古代文明という雰囲気皆さんが持つような遺跡・遺構の研究に、やはり重点が置かれてきました。うっそうとした密林の中に忽然と現れる巨大遺跡は、やはりロマンにあふれています。古代文明の起源、隆盛と衰亡、それぞれの地域の歴史がありました。マヤ研究では、同時にフィールドワーク環境の厳しさも、研究の初期から強調されてきたところです。ここで、研究の歴史を代表して、セイバル遺跡を見てみましょう（スライド）。ロマンに導かれて、科学に至る、そのような実感があります。

## セイバル遺跡

セイバル遺跡は、グアテマラのマヤ低地南部にある代表的な都市国家の遺跡です。マヤ文明の研究初期、19世紀末に、碑文の型取りなどが行なわれました。1895年には、ハーバード大学のピーボディ博物館により、マレー氏の調査があり、都市の平面図が作成され、新たな碑文が発見されました。次いで1914年にワシントンのカーネギー研究所が調査し、1960年代初期のピーボディ博物館の調査につながっていきます。本格的な発掘調査が1964年から1968年まで継続しました。調査責任者は、当時アメリカ考古学の権威とされ、今も読み継がれているアメリカ考古学概説を書いた、ゴードン・ウィリーでした。

その後、遺跡の調査は21世紀まで行われています。2005年からアリゾナ大学の猪俣健氏を団長に、多国籍で学際的な大規模発掘調査が進行し、青山氏の大型科研費の対象にも含まれています。マヤ低地で最古の公共祭祀建築と公共広場は、通説から200年くらい遡り、紀元前1000年頃に建設されていたことが解明されました。

(公開されているスライドから紹介)。セイバル遺跡の構造物A-3は、方形基壇上の神殿ピラミッドで、周囲に石碑が見えます。円形構築物C-79は、先古典期の遺構の上に構築された、3段築成です。この古典期終末期(Terminal Classic Period)は、セイバル遺跡の中心的な時期です。先古典期の遺構は、メキシコ古代文明(テオティワカン文明)の影響(風の神の神殿)との説があります。マヤ文明の構造物は、すでに存在している遺構の上に、さらに構築されることが多くあります。記念石碑第11号には、王の名前と浮彫の肖像があります。ワツルチャテル王の碑は、889年に建立されました。古典期終末期です。

このように、マヤ文明は記念碑や神殿の石彫の研究からも、それぞれの地域の都市国家の盛衰が、かなり克明に復元されています。先述しましたがマヤ文明では、文明が広がった地域全体を支配した統一王朝というものは、ついに形成されませんでした。都市国家が並立して、互いに抗争したり同盟したりを繰り返していった文明の形でした。マヤ絵文字の解読も、次第に進んできました。天体観測を精密に行なって、高水準の暦法を発達させた文明であったことは、よく知られています。

統治と宗教儀礼が一体化しているという、多くの古代文明に共通する特色も、顕著に表われていました。メソアメリカ文明では、神聖なる球技が行なわれていて、王族の生命を賭け

た、競技というには余りに深刻な（現代の私たちの感覚）ゲームがありました。アメリカ南西部、アリゾナ州の先史時代に、ホホカム文化という乾燥地帯の農耕文化があり、多くの建築遺構がありますが、そちらにも「球技場」があつて、先述の「文明の遺伝子」を表現しています。

### サブロフ先生とマヤ文明の崩壊

セイバル遺跡に多くの研究者が関わってきた中に、ジェレミー・サブロフ先生もいて、土器の編年研究も推進されました。サブロフ先生は、私がニューメキシコ大学に留学していた1980年代、ビンフォード先生と共に同大学人類学部の中心的なスタッフでした（学部長）。大学院の授業でマヤ文明のシステムについて親しく学ばせていただきました。今も印象深いのは、「古典期マヤの崩壊問題」です。マヤ文明の古典期（4世紀から10世紀ころに最盛期）が、なぜ、いかにして「崩壊」（collapse）していったのかは、マヤ考古学の大きな課題です。1944年生まれで、1960年代の「ニューアーケオロジー」時代に大学院生、70年代のプロセス考古学での若手世代として過ごされた先生は、システム理論的な観点で、ダイナミックに講義をされて、私は魅了されました。プロセス考古学の立場でマヤ文明を論じた著書も、邦訳されています（『新しい考古学と古代マヤ文明』サブロフ著、青山和夫訳、新評論 1998）。

その後、サブロフ先生はピッツバーグ大学へ、そしてペンシルベニア大学へと移られ、ビンフォード先生は、テキサス州の有力私大であるサザンメソジスト大学へ転出されました。ニューメキシコ大学の一つの時代が終わったと、囁かれました。話題が脱線してしまいました。サブロフ先生の話で覚えていることに、古典期から後古典期への移行は、真に「崩壊」なのかということがありました。古代マヤの崩壊の後も、手工業は発展し、物流や交易も拡大していたと。私が間違つて理解していたなら私の責任ですが、古代文明は世界各地で崩壊するが、実はその後にも分散・拡大しながら受け継がれることが多いという趣旨でした。

私は日本古代の律令制国家から中世の分散的社会への移行を考えました。世界の古代文明は各所で目覚ましい巨大遺跡を残しましたが、そのような社会機構が変化して、それぞれの地域への分散と着実な生産の展開が起きていたのではないかと、と現在も考えているところです。今回講座は文明の展開という、お題ですので、少し脱線しました。古代文明や古代帝国の、権力の一点集中というメカニズムが、変化することは、必ずしも衰亡とは言わないのではないだろうかと思うところです。見かけ上の「壮かさ」に眼を奪われることなく、当時の生産の仕組みと、人々の生活の実際について、いつも考えるべきでしょう。なぜ一極集中が続き、なぜ時代が変化したか、プロセス考古学の命題「なぜ、いかに」を、比較考古学の視点で考えていくべきでしょう。

では、舞台を新大陸からユーラシアへ移して、日本がその一部である「拡大東亜文明」の、古代の後の文明について、中国の中原地域の西側を見てみましょう。

## 中国・寧夏回族自治区

西夏王国の遺産としては、現在の中国「寧夏回族自治区」を中心として、銀川市周辺に大規模な王陵遺跡が残されています。館長撮影スライドを交えてご紹介します。

世界地図を見ますと、黄河は大きくカーブをして、北流、東流、南流、また東流して中原地帯に至ります。その北流する大河の西岸に位置するのが銀川市です。ここは西夏王国の国都で「興慶府」があった場所でした。このあたり一帯は、一面の黄土地帯で、西に山脈を望みます。古代シルクロードの入口にあたる位置で、万里の長城は銀川市の郊外に遺構が残されています。南北に延びる長城は、明王朝の時代に再整備された遺跡とのこと。この長城遺跡へは、学会ツアーで行くことができ、城壁内部の展示室を見学しました。

今回ご紹介する寧夏回族自治区での写真は、2013年6月に「アジア旧石器協会、APA」(Asian Paleolithic Association) という、日本、中国、韓国、ロシアの4か国から構成される国際学会が、銀川市で開催された際のもので、同大会関係者に深く感謝いたします。銀川市では当時、政府による内陸部の経済発展政策が影響してか(識者ご教示)、街を歩くと多くの場所で建設工事が進行していました。寧夏回族自治区の博物館は巨大で、市街地の中心部西側にあります。自治区の歴史、文化、芸術を、総合的に展示しています。自治区の人口は約700万人で、うち35%くらいがイスラム教徒ということです。少数民族として「回族」とされています。これは中国でのイスラム教の旧来の呼称「回教」からきています。博物館(スライド多数)では、中国共産党の長征や、自治区での革命運動の展示も大きく、この地が中国革命の「聖地」陝西省延安に近いことも理由かもしれないと思いました。

APA大会を歓迎して、博物館エントランスホールの巨大なデジタルサイネージには、「熱烈歓迎、水洞溝遺跡、発見(発現)90周年記念会議代表団、当博物館参観指導」(スライド)と見えます。博物館の照明装置なども、イスラム図案が多くあります。展示物でも、アラビア語の古典籍、古いコーラン、回族(回民)の文化財(生活用具)、民族芸能の展示、伝統工芸の刺繍(アラビア語図案)などが、充実していました。興味深いのは、伝統的な茶器で、日本でも見かけそうな形の急須と茶碗、蓋のセットに、アラビア語で装飾されている例です。また掛け軸は、伝統的な中国風(日本でも共通)の作り方なのですが、絵画や賛(?)はイスラム芸術のようでした(読めなくて残念!)。この写真では、風袋は付いていませんが、まさに掛け軸の様式です。茶器や掛け軸などを鑑賞しながら、講座で説明している「文明の遺伝子」について、思いを馳せました。

## 西夏王国と西夏文字

現在の寧夏回族自治区の地は、かつて西夏王国が繁栄した場所です。11世紀から13世紀に盛期を迎えた王国(王朝)です。西夏王国の滅亡は、1227年(宝義2年)とされます。チンギスハンのモンゴルに滅ぼされました。滅亡の後も、独自の「西夏文字」は使用され続けて、1500年頃の古文書も確認されています。その後、次第に西方からいくつかの民族が流入して、この地方はイスラム化していきました。民族は次第に同化が進んで、回族と呼ば



れるようになったとのこと。

銀川市の西の郊外には、西夏王国の王陵遺跡が残されています。西夏の建国は 1032 年（1038 年を取る説もあります）、初代皇帝は「景宗」で、博物館展示に像があります。景宗は、Li Yuanhao 李元昊（日の下に天の字、日本では使わない文字）で、王陵は「泰陵」、在位 1038 - 1048 年。皇帝は野利仁栄に命じて「西夏文字」を作らせたといわれます。文字数は約 6000 字あり、非常に複雑な外見です。ここでまた、当館今年の春季特別展「知の大冒険」から振り返ってみます。東洋文庫の名品の展覧会でした。ご来場いただいた皆さん、ありがとうございました。

「番漢合時掌中珠」（ばんかんごうじしょうちゅうじゅ）は、1190 年に成立した書物で、東洋文庫の展示品は、羅福成 1924 年翻刻です。西夏語と中国語の対称単語集で、スライド左下の例「病患」（漢語）の左に西夏文字で漢語の発音、「病患」の右に対応する西夏語（西夏文字）、その右に漢語で西夏語の発音を示すという構成です。（展示図録 No.6）。

西夏語はタングート系言語で、文字の構成原理は漢字から影響を受けていますが、文字の構成要素（へん、つくり、かんむり）は、独自の発明で、構成原理の組み立て方は、表意文字、会意文字で、漢字と類似します。発音も同じ文字を用いて表現できるとのことです。西夏文字研究の第一人者、西田龍雄氏（言語学）の成果から、少し紹介します（スライド）。諸方言が新たな文章語として確立した意義が解説されています。

西夏は仏教を保護したので、仏教経典の西夏語訳も行なわれ、経典の編纂が進められました。スライドは、西夏語による「金光明最勝王経」（Golden Light Sutra）です。

王陵博物館の敷地に建っている、碑文が西夏文字で書かれています。見る人にとっての、未知の文字は、古代文化への興味をかき立てるように感じますが、皆さんいかがでしょうか。ついでながら、古代文字の解読の試みは、考古学者、言語学者の長い研究の歴史があつて、それらの解読物語には、いつもロマンを感じることです。エジプト神聖文字、メソポタミアの粘土板の楔形文字、マヤ文明の絵文字、エーゲ文明のミケーネ文字（線文字 B）など、興味は尽きません。手掛かりとなる碑文（エジプト神聖文字のロゼッタストーンが有名ですね）、対照される書物、また何が書かれるかという記載対称の限定（古代マヤの暦、王名など）、文章の構成法則の解明など、ロマンと科学の接点があります。

## 西夏王国文化の特徴

銀川市の西の郊外、山脈の裾野に、西夏王陵の史跡群があります。史跡回遊の拠点となっている西夏王陵博物館の展示から紹介します。博物館は 1998 年に開設され、「文化観光」的な史跡整備の方針もあるようです。（ショップや露店街もいろいろ充実）。広大な平原の中に、忽然と大博物館が現れるようすは、印象的でした。（スライド多数）。

導入の説明板に要約されるところです。「西夏文化は、タングート（党項）文化を中心にした多民族文化である。壁画・彩画芸術は、唐と宋の芸術を継承して、タングート、チベット、ウイグルなどの民族文化内容と融合し、新たに発展した。中華民族文化芸術の宝庫があ

る。西夏文字を創成し使用した。仏教の伝播と経典の解釈、唐や宋の文化を取り入れ、独特の民族的風格があり、混然一体とした西夏文化を形成した」。観覧して、私はやや国家政策的な部分も感じましたが、それもまた歴史博物館を各地で探訪する関心のひとつです。

展示物には、一種非常に不思議な雰囲気を漂わせている文物が多く、文明の融合という講座テーマに、興味深いと思って取り上げました。(スライド)。陶磁器の数々、曼荼羅様の掛け物(チベット仏教の諸仏表現)、仏像の数々、獣像の上の仏像(おどろおどろしい?チベット佛?)、鍍金銅牛像、墨書土器(西夏文字の墨書の坏形土器)、唐から宋の銭貨などをご覧ください。

あらためて「**拡大文明**」「**文明の遺伝子**」という枠組みで考えてみますと、興味深いと思います。ふと思うに、銭貨の丸い形と四角い穴、大きさと周囲の縁など、富本銭や和同開珎から寛永通宝までの、脈々とした共通項を感じてしまいます。国内の銭貨が標準造幣されない時代(中世や戦国期)は、輸入銭貨が基準貨幣となりました。地域豪族は、大きなカメなどに貯蔵しました。穴に紐を通して綴じてまとめました。在所の地下に埋めて置きました。

(時々、埋蔵銭の大甕の発掘ニュースがあります)。朝鮮王朝(李朝)にも「常平通宝」(サンプイェントンボ)という標準銭貨がありました。「**東亞型銭貨**」と仮に呼びたいような感じですね。ついでに「**拡大地中海文明**」では、周囲が縁どられ、一面に皇帝や王の横顔など刻印があります。今でも各国に似た類型がありますね。

銀川市は、国都であった「**興慶府**」の所在地でした。府内地図と宮廷の復元画を見ましょう。(スライド)。都城である興慶府城は、城壁で囲まれた府内には碁盤の目のように街路が配され区画に役所があり、中央北部に宮殿区画があります。復元画で気づくのは、仏教僧の活動、王族・貴族の文化融合的な衣服(中国とも違うし、西域とも違う、ましてや朝鮮や日本とはまるで違う)、宮廷内の日常の光景(異国風だがどこか中国的)などです。埋葬や騎馬の士の図もあります。

## 西夏王陵の史跡公園

考古学の調査によって、皇帝陵は9か所が、王族・貴族の墓所とされる遺跡は200か所以上が確認されています。スライドでご紹介するのは第2号王陵で、「**嘉陵**」(Jialing)と名付けられています。太祖・李徳明(Li Deming, 981 - 1032)の陵墓で、王国建国時(1038年)に改めて埋葬された陵墓とされます。発掘調査は「**寧夏考古工作隊**」を中心に、1972年から行われてきました。文化大革命の最中からになります。王陵遺跡群は、広さ50平方キロに及び、標高は1130m~1200mの平原に所在します。

平原の中に方形の王陵が区画されて、巨大な土でできた塔(塔の残存したピラミッド状の山)や櫓、陵墓施設が配置されていました。(スライド多数)。韓国、漢陽大学のペ・キドン教授とも同行しました。外城、内城に囲まれて、巨大な陵台があります。陵塔は、直径が基礎の部分で36m、現存する高さは24mあります。塔式の陵台は、西夏が仏教を信仰していた状況をよく示すとされます。南からの内城への入口には、囲いである「**月城**」がありま

す。内城に入ると、供物を捧げる儀礼を行なう「献殿」の遺構があり、埴（セン。床に敷くタイル状の瓦、紋様が浮彫状にある）が敷いてありました。

建造物は、黄土（レス）を固めて築き、周囲をレンガ、木材で建築しました。廃絶してからの長年の間、埋没することなく遺存していました。建造物の芯にあたる部分が、残存しているものです。降水による浸食で、表面形状の凹凸が目立っています。史跡公園として、現状を整備しています。過度の（復元的）修復は行なわれていません。これら王陵群は、国家の文物重点保護地域になっています。世界遺産にも登録されています。上空からの写真で、内城、月城、外城、各建造物の空間構成がよく分かります。レンガを製作した工房遺跡も調査されています。

## 同時代の古代東北

さて、西夏王国が繁栄していたころ、「拡大東亜文明」の反対側（中華地域の北東）では、何が起きていたのでしょうか。少しだけ取り上げてみましょう。東北地方の11世紀は、戦乱を伴って新たな秩序へと向かっていました。スライドは「後三年合戦絵詞」（絵巻）で、公開されている「e 国宝」からです。「e 国宝」は、国立文化財機構（東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館、奈良文化財研究所）による、国宝、重要文化財の画像を、高精細で公開するものです。同機構の機関が所蔵している文化財を、画面上で鑑賞することができます。

後三年合戦（1083～1087）は、陸奥守源義家（八幡太郎義家）が、出羽の豪族清原氏一族の内紛に乗じて、清原氏を滅亡に追い込んだ戦乱でした。この絵巻は貞和3年（1347）の基準作で、後三年合戦に取材した現存最古の絵巻です。詞書は忠実に絵画化されていて、反復する同一構図で戦闘や殺戮は凄惨さを増し、金沢の柵（横手市）が次第に陥落していく様子が伝えられています。

絵巻物は、右から左に向かって、時間が経過していきます。平安貴族社会の「辺境」に登場した、つわもの（兵）、もののふ（武士）、ムサ（武者）については、当時に書かれたもので、同時代の受け止め方が知られますが、絵巻物の描写はリアルです。（保元元年[1156]からは・・・）、「・・・ムサノ世ニナリニケルナリ・・・」（愚管抄）という、都の高僧、慈円の慨嘆の気持ちが伝わってくるような気がします。

この絵巻の模写を、間近に鑑賞できる施設があります。横手市にある「後三年の役 金沢資料館」で、同市金沢本町の故・戎谷南山翁が、東京国立博物館に通い、精魂込めて模写した「後三年合戦絵詞」全5巻で、昭和13年に完成し、金沢八幡宮に奉納されたものです。（横手市観光協会 HP による）。以前に私も鑑賞して、そのあまりに凄惨を極める描写に、驚きを覚えました。

この後、東北古代は藤原清衡による中尊寺建立、平泉文化の時代に転換していくことになるのでした。平泉文化が持っていた北方的性格と京都市性格の両面については、しばしば論じられます。ここでは、北東アジアの一角としての地理的な位置づけを、いま一度、確認し

ておきたいと思います。世界遺産にもなった仏教的世界の現世浄土の姿は、後三年合戦絵詞の残酷な描写と、表裏の関係でもあったのでした。

## 結びにかえて

今回講座では具体的に、マヤ文明やインダス文明、日本古代の研究事例と、中国の寧夏回族自治区の事例を通して、「**拡大文明**」の概念、「**文明の遺伝子**」という考え方を問いかけてみました。本稿では、限られた時間のお話では尽くせない理論的な部分についても、重点的に構成しました。

高等学校レベル向けの「世界史」の図録集を開いてみますと、古代文明の発生から、世界の地域古代史、中世や近世の諸文明の盛衰、近代国家の変革、現代史の流れまで、非常に細かい図（チャート、流れ図）で、世界の歴史が図化されています。一見して目が回るような詳細な世界史一覧表になっています（スライド：帝国書院「総合新世界史図説」）。改訂を繰り返して版を重ねています。

ひとつひとつの文明の部分を見て、それが研究されてきた歴史を思い出すと、実に多くの歴史研究者たちの努力が、感動をもって迫ってくるような気が致します。それぞれの文明のそれぞれの時代・部分について、膨大な個別研究が積み重ねられてきました。ひとつひとつの図の部分について、専門の学会があり、専門の雑誌があり、国際的な研究者集団が、日々に資料の研究を蓄積し続けています。

私たちは、このような研究の蓄積の上に立って、今を生きている世界の動きを考え、将来に向けての選択を、日々に繰り返しているわけです。そのようなことを思うにつけても、「歴史の試験は暗記もの」とか「記憶力が勝負」とか、昔から言われている歴史への片寄った見方を脱して、今を生きる糧としての世界史を求めていくべきであります。ひとつには、大きく比較し、自分なりに総合的にとらえなおすこと、また当時その場所で何が起きていたか、実際の生活復元を通して、歴史の一コマへの「共感」が、情報がどんどん増加の一途をたどる中で、いっそう大切になっているように、思われてなりません。

歴史家（ないし考古学・人類学者）の一人としまして、細分化が著しい専門分野の個別の深みにはまる畏を自戒し、人類のたどってきた道筋を自分なりに考え、皆さんに問いかけていくことの重要性を思い直す機会として、館長講座を進めて参りました。日本考古学で「通説」とされる考え方への、疑問についても多く話しました。いちいち「諸説あります」と断わっておりますので、そのようなところでは、それでは通説とは何であるか、お考えいただければ、望外の幸いであります。

これにて、今年度の館長講座を、閉じさせて頂きます。ご清聴まことに有難うございました（最後までお読みいただき、有難うございました）。

（本稿は、当日スライドを踏まえつつ、講演内容に補足して加筆し、再構成したものです。なお参考文献は、日本語の入手・閲覧しやすいものから選択しています。今回は歴史的な範

囲が広いので、再掲も含めてあります。)

## 参考文献

青柳正規 (2009)『興亡の世界史 00 人類文明の黎明と暮れ方』講談社 (学術文庫版もあり)。

青山和夫 (2007)『古代マヤ 石器の都市文明』京都大学学術出版会。

青山和夫 (2012)『マヤ文明 ー密林に栄えた石器文化』岩波新書。

青山和夫 (2021)「マヤ文明と石器使用痕分析」『考古学ジャーナル』No.749 所収。

エルマン・サーヴィス (1979、原著 1962)、松園万亀雄訳『未開の社会組織』人類学ゼミナール 12、弘文堂。

エルマン・サーヴィス (1979、原著 1971)、増田義郎監修『民族の世界』講談社。学術文庫版もあり (1991)。

ジェレミー・サブロフ著、青山和夫訳 (1998)『新しい考古学と古代マヤ文明』、新評論。

仙台市史編さん委員会編 (1999)「第3章 弥生時代」『仙台市史 通史編 1 原始』、281 - 416 頁。

チャイルド、V.G. (1951) 禰津正志訳『文明の起源』上・下、岩波新書。

東洋文庫 (公益財団法人) 監修 (2022)『特別展 知の大冒険 ー東洋文庫 名品の煌めきー』東北歴史博物館特別展図録、読売新聞社編集・発行。

ルイス・ビンフォード (2021、原著 1983) 植木武訳者代表『過去を探究するー考古資料解読の方法と実践ー』雄山閣。

藤尾慎一郎 (2021)『日本の先史時代』中公新書。